自己への脅かしがゆるしに及ぼす影響

○若山和樹¹・八田武俊²・八田純子¹

(¹愛知学院大学・²岐阜医療科学大学)

キーワード：ゆるし・自己への脅かし・怒り

The effect of threats to self on forgiveness

Kazuki WAKAYAMA¹, Taketoshi HATTA² and Junko HATTA¹

(¹Faculty of Psychological and Physical Science, Aichi Gakuin University

²Department of Medical Technology, Gifu University of Medical Science.)

Key Words: forgiveness, threats to self, anger

目 的

これまでゆるしは、道徳的基準に従って自らの意思でネガティブな反応を放棄し、代わりにポジティブな反応が生じることと定義した Enright(2001)に代表されるように、おもに情動や動機づけに注目して研究が進められてきた。一方で、Thompson and Snyder(2003)のようにゆるしにおける内的変化は情動や動機づけに限らず、認知的側面においても生じるとする指摘もあるが、ゆるしの認知的な側面に注目した研究はいまだ少ない。そこで、本研究ではゆるしの認知的側面として、自己への脅かしに注目した。

自己への脅かしとは、被害によって自らが物理的・心理的に傷つく可能性に関する評価を指し、本研究では、ゆるしは出来事の再評価過程において、自己への脅かしが低下することで生じると考える。また、自己への脅威となる対象について、実際に危害を加えた他者を指す「対人脅威」、脅威を知覚した出来事や場面を指す「出来事脅威」、所属集団の秩序や安全性、信頼感といった個人が抱く世界観を指す「世界観脅威」を想定した。

ゆるしの認知的要素として仮定する自己への脅かしは、加害の意図性や継続性によって変化すると考えられる。ゆるしは加害行為が意図的でない場合や、加害者から搾取されるリスクが低下した場合に生じやすいことが示されている(Mullet & Girard, 2001; Burnette, McCullough, Tongeren, & Davis, 2012)。それゆえ、本研究では加害者の意図性や被害の再発可能性の低さは自己への脅かしを低下させ(仮説 1 と 2)、自己への脅かしの低下はゆるしを促す(仮説 3)と予想した。

方 法

参加者は大学生 151 名(男性 80 名、女性 71 名)で、はじめ上司に叱責されるシナリオを読んだ後、質問項目に回答し、その後、加害者の意図の有無と状況の再発可能性によって自己への脅かしが操作されたシナリオを読んだ後、同様の質問項目に回答した。なお、講義時間において配付、説明された質問紙には参加に同意できる者だけが回答した。質問項目は怒り(2 項目)、ゆるし(2 項目)、対人脅威(2 項目)、出来事脅威(3 項目)、世界観脅威(3 項目)に関する項目からなり、参加者は“全くない(1)”〜“かなりある(7)”の 7 件法で回答した。

結 果

シナリオの前後で測定したゆるし、怒り、対人脅威、出来事脅威、世界観脅威の項目得点を従属変数、意図性と再発可能性を独立変数として分散分析を行った。その結果、すべての項目得点についてシナリオと意図性、および再発可能性の交互作用が有意であった(all $ps < .01$)。ただし、対人脅威における意図性の有意傾向であった($p = .058$)。すべての脅威や怒りについてシナリオ操作前では差はないが、意図性および再発可能性が高い条件における参加者はそれが低い条件の参加

者よりも強い脅威や怒りを知覚していた。同様に、ゆるしについても意図性と再発可能性が高い条件における参加者は、それらが低い条件の参加者よりゆるせないと知覚していた。ただし、意図性についてのシナリオ操作前の時点で意図性について有意差がみられた。

つぎに、ゆるし、怒り、各脅威得点についてシナリオ前後の差分を求め、ゆるしを従属変数とし、step1 で怒り変動量、step2 で対人脅威、出来事脅威、世界観脅威変動量を説明変数として投入した階層的重回帰分析を行った。その結果、怒り変動量と世界観脅威変動量はゆるし変動量を有意に説明することが示された。また、怒り変動量を従属変数とし、step1 で対人、step2 で出来事、step3 で世界観の各脅威変動量を説明変数として投入した階層的重回帰分析を行った結果、対人脅威変動量と出来事脅威変動量は怒り変動量を有意に説明することが示された。

step	説明変数	β			ΔR^2
		モデル1	モデル2		
1	怒り変動量	.62**	.54**	.39**	
2	自己への脅かし 対人脅威変動量 出来事脅威変動量 世界観脅威変動量		.09 .11 .25**	.06**	
R^2		.39	.45		
調整済み R^2		.38	.44		
F 値		94.50**	59.40**		

step	説明変数	β			ΔR^2
		モデル1	モデル2	モデル3	
1	対人脅威変動量	.52**	.29**		.27**
2	出来事脅威変動量		.29**		.03**
3	世界観脅威変動量				
R^2		.27	.30		
調整済み R^2		.26	.29		
F 値		54.84**	32.20**		

** $p < .01$

考 察

本研究の結果は、自己への脅かしの種類によってゆるしに影響を及ぼす過程が異なることを示している。人や場面など明確な対象に関する脅威を知覚した時は、その対象に怒りを向けることができるが、世界観の場合、対象は漠然としたものであり、怒りを向ける対象は具体的に存在しない。そのため、対人脅威や出来事の脅威は怒りを媒介してゆるしに影響するが、世界観脅威は怒りを媒介せず、直接ゆるしを促していたと考えられる。

引用文献

- Burnette, J. L., McCullough, M. E., Van Tongeren, D. R., & Davis, D. E. (2012). Forgiveness results from integrating information about relationship value and exploitation risk. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 38, 345–356.
- Enright, R. D. (1996). Counseling Within the Forgiveness Triad: On Forgiving, Receiving Forgiveness, and Self-Forgiveness. *Counseling and Values*, 40, 107–126.
- Mullet, E., & Girard, M. (2000). Developmental and cognitive points of view on forgiveness. In M. E. McCullough, K. I. Pargament, & C. E. Thoresen (Eds.), *Forgiveness: Theory, research, and practice* (pp. 111–132). New York, NY, US: Guilford Press.
- Thompson, L. Y., & Snyder, C. R. (2003). Measuring forgiveness. In S. J. Lopez & C. R. Snyder (Eds.), *Positive psychological assessment: A handbook of models and measures* (pp. 301–312). Washington, DC, US: American Psychological Association.